

大学セミナーハウスで考える

—ミニ・ミニ・シンク・タンクの試み—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに—問題意識—

①八王子市にある大学セミナーハウスで、(1996年)11月22日から24日に開かれた第23回国際学生セミナーでは、久しぶりによく勉強させて頂いた。「転換期の世界」、「アジアにおける日米関係」のメインテーマのもとに、120名の参加者(うち外国人の方40名)が集った。私の出た「グローバリズムとリージョナリズム」の演習には24名が参加。演習中は、すべて英語でディスカッションが行われた。驚いたのは、2名の指導教授はもちろんのこと、参加者の半数以上の方が、ほぼ完璧な英語を駆使し、自分の思うことを思うだけ表現でき堂々と議論ができるということであった。

私を含め残りの方はどうかというと、そこで行われる議論の大半は聞き取れるが、いざ自分の発言となると、思ったことの5分の1も言えず、5分も経つとしどろもどろになっていた。この差はどこから出てくるか。メンバー全員に聞いてみたら面白いことが判った。

よく自己表現できるグループは、半年以上、正規の留学をしていた。聞き取りまではよくできるが、よく話せないグループは半年以上の留学がなかったようだ。早急かも知れないが、ここから推測できることがある。もし英語のよい使い手になりたかったら、いくら日本で日本人から熱心に英語を日本語で教わっても一向に自己表現能力は身につかないので、せめて半年以上、日本人の余りいない学校に入り英語のみの生活を送り、どんどん英語で表現する以外にない、ということだ。

②それにしても、今の学生はよく勉強する。事前に、とはいってもわずか一週間前に送られてきた合計100ページにも及ぶ、同一テーマでの昨年度日本で出版された、最高レベルであろうと思われるフォーマル・イングリッシュと専門用語だらけの英語の論文を、ほぼ全員が読了済であった。1ヵ月余り前に参加申し込みをした時点から、図書館にこもり、自ら選択したテーマについて研究したり、ゼミの先生をつかまえて、不明なところを質問攻めにした学生も多いと聞き及んだ。特に、女子学生は熱心で、全体討論の際にも、マイクを握りしめ熱心に、かつ理路整然と、わかりやすく、ウイットに豊んだ議論を、正確な英語で展開する人が多かった。

③私自身、10月から毎週土曜日は上智大学の社会人コースに通い、国際関係の勉強をさせていただいていることは先月号の「みにむ」にも書かせていただいた。休み時間に学生食堂(カフェテリア)に行くと、かなりの学生が英語の新聞や雑誌を熱心に読んでいる姿を目にする。数多くいる外国からの先生方や留学生と、何のてらいもなく、英語で議論しつづける光景も日常的に見られる。授業の準備にも熱心で、よく予習して出席している。勉強内容の理解も深まり、試験の準備もかなり前から行うので、よい内容の答案が多いと知り合いになった先生方から聞

き及ぶ。

④この「みにむ」をお読みの皆様は、社会人の方が多いと思われるので、余りお気付きにならない方が多いと思うが、現代の学生は、10年、20年前の学生と比べ、はるかに熱心に勉強に励み、確実にまた、英語を十分に身につけている(ちなみに、開倫塾には現在、中学3年生が650名余り在籍しており、実用英語検定3級にはそのうち250名が合格している。準2級合格もその10%以上存在する。開倫塾を始めさせていただいた18年前には考えられない優秀さである。30年前は、英検3級合格は各中学校で合計10名はいなかったと記憶している。大学生のみならず、中学生も20～30年前の学生に比べはるかによく勉強しているといえる。)

⑤日本は憲法第九条に守られて、徴兵制がない。学校を終わった学生が、一瞬間も軍隊に行くことなく、卒業の翌月から仕事に就くことができる、世界でも希有な国である。その学生のレベルは、今までの日本の歴史上最高であると思う。そこで、私を含め社会人の義務は、そのような第二次大戦の惨禍の結果得られた平和憲法のお陰で1日も軍隊に行かずに済んだ最高レベルの学生に、いかに生き生きと働く環境を提供できるかということだ。彼らが自分で選んだ職業に誇りを持ち、生き甲斐をもって伸び伸びと働き、生活する環境を整備することが彼らを迎えることではないかと思う。そんな基本的な作業もしないで、自分が65才を過ぎたから、若者よもっと働いて自分たちの面倒をみよ、と20年後、30年後に言っても、「あなた達はちゃんと私達を社会に迎えてくれましたか」と「不作為責任」(何もしなかったことに対する責任)を問われるのみだ。

⑥前書きが長くなって恐縮だが、ミニ・ミニ・シンク・タンク「開倫総合研究所」は、開倫塾創設20年を2年後に迎えるにあたって、今まで地域の皆様にお世話になったせめてもの恩返しとして、日本の歴史上最も立派に育ってきつつある現代の学生を、心温かく社会人として迎えられるような環境を整備するための、基礎的な研究を行うべく、昨年暮に静かに発足させていただいた。人間のやることなので、どこまでできるか判らないが、コツコツと、できるだけ地道に基礎的な研究作業を行っていきたいと思う。

2. ミニ・ミニ・シンク・タンク・開倫総研とは

①「講演会」、「セミナー」をどんどん開催。

「趣味は何ですか」といわれると「セミナー参加です」と答えるくらい、私自身は毎日のようにセミナーに出席している。もし御要請があれば「間違いだらけのセミナー選び」というテーマなら、2時間でも3時間でも「セミナー」が開けるほど、セミナーにはよく出ている。「林さんは客プロだね」とある有名な先生から言われ複雑な思いがしたことすらある。今度は私たちが主催する番なので、徹底的に参加者の立場に立った聞けば必ずためになるセミナーを開催するよう心掛ける。

*実際、開倫塾では、生徒のレベルアップのためにはまず教職員のレベル向上という考えのもとに、開倫塾の教職員のレベルアップのためのセミナーを、ほぼ毎週のように開催している。(内部向けだが、今後公開してよいものは公開させていただく。自分で言うのもおかしいか

も知れないが、かなり本格的なので、これに参加したい方は開倫総研までお電話でお申し出下さい。)

②機関誌「かいりん」の発行

原則として開倫塾のある市町村の大学・短大・専門学校をはじめとする先生方、有識者の方々に、できるだけ地域の特性に合った、しかも、一般市民が読んでわかりやすい表現の論文を書いていただき掲載させていただく。一人ひとりの市民の皆様にお役に立つのみならず、各市町村の発展にも寄与するような内容にさせていただくことを目指す。

また、論文をお書き下さった先生方には、定期的に講演や、セミナーをお願いし、更に深い内容理解にまでもっていきたく思う。(創刊号が出ましたので希望の方はお電話を下さい。)

③意識調査の実施

一つの現象について一体どのように人々は思っているのだろうかという意識調査を時宜に応じて行っていく。物事を考える上で机上の空論を排すことが大事だからだ。

④シンク・タンクの研究

欧米にたくさんあって、日本に数少ないものの一つが「シンク・タンク」であるといわれて久しい。「シンク・タンク」とは何か、をできるだけ調査し、日本におけるシンク・タンクの実態を少しずつ明らかにしたうえで、あるべきシンク・タンクの姿を示し、自らそれに近づきたい。同時に、もし本当に日本社会にシンク・タンクが必要不可欠であるならば、日本のシンク・タンクの育成にも参加したい。

⑤当面の研究テーマは「結果の出せる職業人の育成」

開倫塾では8年前から生徒と保護者の皆様向けの塾内誌「開倫塾ニュース」を毎月1回3500部発行しつづけてきたが、その中に、「How To Become」シリーズ(職業に就くにはどうしたらよいか)がある。今春で100回になるので、そのつづきとして、各分野で「結果の出せる職業人になるにはどうしたらよいか」を調査研究し、少しずつ明らかにしていきたいと思う。

片寄った考え方かもしれないが、少子化のもと、高齢化社会を支え、なおかつ、年1800時間労働制のもとで、今と同じだけの世界最高賃金を維持しながら、一人ひとりの働き手が心豊かな生活を送るためには、世界一高い内容の仕事をしなければならないと思う。「名ばかりの職業人」から一日も早く脱却して、目指すべきは「結果の出せる職業人」である。

⑥この他にも「北関東4県の研究」、「環太平洋経済圏の研究」、「EU研究」、「失業問題研究」、「エスニック問題」等々、取り組むべきテーマは山ほどある。

もし、アセアン諸国がEUと同じように同一通貨を使い、一国と同じになったら、また、中国がWTOに本格参画したら当地の繊維産業や、下請工場、農業はどうなるのか。アジアやヨーロッパ、ラテンアメリカを含むアメリカの変化が、直接我々の日々の生活に結びつき、失業問題となって社会問題化することは、明確である。

先日来、財団法人の日本国際問題研究所から出ている月刊誌を過去3年分お送りいただいて毎週1冊ずつ読んでいます。読めば読むほど、今ほど国際経済の分野について勉強している人を

各市町村で 10 名単位で育てておかないと、国際変化を読み違え「あっ」という間に市町村の主要な業種が吹き飛んでしまうような気がして、恐ろしい思いがしてきた。

*各市町村や、一定規模以上の企業では、ぜひ国際情勢、とりわけ国際経済に強い職員を二ケタ単位で兼任でもよいから任命して、調査研究費を、とりあえず一人に年間 100 万円与えることをおすすめる。(その人達に「国際交流」の仕事は絶対にやらせないこと。主要な地場産業の海外や国内での動きについての調査研究のみを徹底的に、「今までの仕事との兼任」でもよいから調査費年 100 万を渡し自由にやらすこと。会社経営者を集めたセミナーや懇親会等にまわす予算があったら、そこから 1000 万削って、一人に 100 万円ずつ、10 名に渡すことをおすすめる。この 1000 万で、我が街の主要産業が吹き飛ばされずにすむかも知れない。とってつけたようなセミナーや懇親会、異業種交流、場当たりの会議をいくらやっても、産業空洞化の対策にはならない場合が多い。また、いくら部下が勉強しても、最終決定権者が勉強不足では、街や企業の行方も思いやられる。トップに立つ人ほど、難問だからといって逃げないで、どんなにお金がかかっても、辛くてもたえず勉強することが、また、最も優秀と思われる部下から順に徹底的に勉強させることが大事だ。)

3. おわりに

①日本は世界でもまれな、基本的人権の最も尊重されている国の一つであると確信する。その意味で、この国の自由主義・民主主義は完成の域に入ったと思われる。(日本の新聞やテレビばかりに接していると、日本は世界最低の国、これ以上ひどい国はないように思う方が多いのだが、ヘラルド・トリビューンを毎日、また、ロンドンで出しているエコノミストを毎週読んでみると、解決すべき問題は数多くあるかもしれないが、日本は政治的にも、経済的にも、最も安定している国の一つであるという確信が更に深まる。)

②その中でも思想・表現の自由は最も尊重されていると思う。ぜひこの「みにむ」をお読みの皆様も、自分でシンク・タンクを作りたいと思ったら、誰に遠慮することなく、自己責任、自助努力で、どんなテーマでもよいから調査研究し、その成果を発表したり、セミナーを開きディスカッションを深め、あるべき姿を目指すべきかと思う。

③そのような、基礎的な作業をコツコツやる市民が増えれば増えるほど、その市町村には活力が生まれ、今まで学校で一所懸命勉強してきた学生達を迎える環境が整備できるような気がする。

一人でも、二人でも、ミニ・ミニ・シンク・タンクはできる。私もがんばりますので、一緒にがんばりましょう。